



# すたち

徳島大学附属図書館報 No.47

1993. 4

## 目 次

新入生の皆さんへ	図書館の仕事と利用上の留意点	8
私と図書館	図書館の活用法(その一)	10
〈私の研究 シリーズ6〉	〔図書館情報〕	
シェーグレン症候群の疾患モデル	外国人留学生用資料コーナー	
私と一冊の本	の設置について	11
〈読書のすすめ〉	本館情報検索コーナーの利用に	
「ある」ための読書	ついて	12
私の図書館利用法	平成4年度(第2回)徳島大学	
〈私の一冊の本〉	学術情報に関する講演会開催	13
海辺の扉	会 議	14
本と社会	本学教官著作寄贈図書	14
私の図書館での思い出	人事往来	15
〈利用法〉		

### 『新入生の皆さんへ』

## 『私 と 図 書 館』

石 川 栄 作

標記のテーマでエッセイを頼まれて、咄嗟に浮かんできたのが「図書館は出会いの場」ということであった。日頃から図書館について考えていたわけではないが、どうやら私は無意識のうちに図書館とはそのようなものだと考えていたようである。

私が図書館を本格的に利用し始めたのは大学生になってからである。高知県の西端の小さな町で生まれ育った私は、二十数年前、博多の街にあこがれて福岡大学へ入学した。入学していきなり入ったトイレには「神(紙)に見放されたら、自ら運(うん)をつかめ!」という落(楽)書きがしてあったが、その日から四年間私が自らの運をつかみ、自らの道を切り開いていったのは、そのト

イレの建物の隣にあった三階建ての大学図書館である。授業の合い間によくそこへ足を運び、ときには授業をさぼって読書に耽ったものである。私と同じ時間帯にいつも利用する学生も何名かいて、彼らとの友情もここで深まったと言ってよい。彼らとは卒業後も「皆和会」（皆、若いの意味）なるグループを作って、数年に一度全国各地から集まって飲み会を続けている。図書館はもちろんそのような人との出会いの場であってもよいであろう。しかし、私が冒頭に記した「出会いの場」とはそのような意味ではない。誇張した言い方をすれば、書物を通しての「さまざまな世界との出会い」である。一冊の本の中には読み方次第で、多少の感動、発見、見知らぬ世界との出会いがあるはずであり、その本を読み終わらぬうちに自然と次に読むべき本も見つかるものである。そのような読書の仕方や喜びを教えてくれたのがこの図書館であり、また私が中世ドイツ文学に興味を持ち、将来それを研究してみたいと思い始めたのも、この図書館利用の習慣があったのこともと言っても過言ではあるまい。

そうして私は大学を卒業すると、同じ博多の九州大学大学院へ進んだ。そこではさらに深い図書館との付き合いが始まるが、独文学研究室の書庫に初めて入ったときの感動はまことに筆舌に尽くしがたい。中世ドイツ英雄叙事詩『ニーベルンゲンの歌』研究のかつての権威とも言うべき雪山俊夫博士（元京都大学教授）の膨大な蔵書が「雪山文庫」として所蔵されてあったからである。現在入手不可能な1800年代の貴重なドイツ語の古書ばかりである。私の生涯のテーマは一瞬にして決まった。この古書を手にとってページをめくっていると、ときどき雪山博士のハガキや原稿の一部が発見されたりして、別の感動を覚えたりする。古い書物にはこのような出会いもあるから楽しい。この「雪山文庫」の利用は、それから四年後に徳島大学へ奉職してからも続いた。少なくとも年に一度、多いときには二ヶ月に一度の割合で博多へ出かけ、古書収集に努めた。昨年、博士論文として都文堂から公刊した『ニーベルンゲンの歌』— 構成と内容 — は十数年にも及ぶその古書利用の成果である。しかし、それは膨大な資料のうちのごく一部を利用したものに過ぎない。「雪山文庫」の利用はまだまだこれから先も長く続きそうである。

このように現在、定期的に博多の図書館へ出かける一方、徳島大学でも附属図書館でいろいろと文献収集や図書購入等でお世話になっている。ときどき書庫に入って蔵書を調べさせてもらったりするが、思わぬ書物を発見したりして、新たな研究テーマが浮かんでくることもある。やはり図書館はさまざまな出会いの場である。今後はドイツやオーストリアの大学及び教会等の図書館を調べてゆくのが私の大きな課題であろう。どんな出会いが待ち受けているか、今から楽しみである。目下急ピッチでその準備のため資料整理に取りかかっているが、資料の整理をすればするほど、為すべき課題は無尽蔵に生まれ出てくる。私の場合、資料整理の大半は多くの書物を読むことであるが、読書は読み終えると、表面的には終わるものの、内容的にはようやく新たに始まるのだということ強く感じる今日この頃である。（総合科学部ドイツ語教授人間社会学科言語文化教授）

## 『私の研究』

# 『シェーグレン症候群の疾患モデル』

林 良 夫

シェーグレン症候群とは口腔乾燥症（ドライマウス）眼乾燥（ドライアイ）を臨床的主徴とし、やがて慢性関節リウマチをはじめ多彩な全身症状をきたす原因不明の難治性の自己免疫疾患であり、好適な疾患モデルの開発が待たれてきた。臨床上の初発症状として唾液腺・涙腺の自己免疫性病変

の発症が中心となることから、実験的には近交系マウスにおける自己免疫性唾液腺炎・涙腺炎の疾患モデルが必要とされる。従来までにシェーグレン症候群の誘発モデルとして生後3日目の胸腺摘出マウスに唾液腺関連抗原の感作を加える系を提示し、その発症には近交系マウス間で系統差が存在しT細胞を中心とした免疫調節異常に遺伝的要因が関与していることを報告した。老人研(東京都)時代に、SPF下の老化マウスがたやすく入手できたこともあり、ある種の近交系老化マウス(BDF1, C57BL/6)では加齢の進行とともに高頻度に自己免疫性唾液腺炎が自然発症していることを見いだした。老化に伴う免疫調節異常と自己免疫疾患の発症との関連性を実験的に初めて示唆することができた。最近では、自己免疫性唾液腺炎・涙腺炎を自然発症するMRL/lprマウスを用いて、臓器局在性自己免疫疾患の発症機序・病態形成の解析を試み、IL-1, TNF, IL-6などサイトカイン遺伝子の過剰発現が自己免疫性唾液腺炎の発症と進展に関与している事実を明らかにし、その際に、細胞接着分子ICAM-1/LFA-1経路が自己免疫性唾液腺炎の成立に重要な役割を果たしていること、更に局所組織に破壊をきたす自己反応性T細胞のレセプター解析からその発現には一定の拘束性(Vβ8)の存在することが判明している。また、MRL/lprマウス唾液腺局所に浸潤した単核細胞を分離・調整した後、SCIDマウス腹腔内に投与すると8週後に唾液腺・涙腺にCD4T細胞による高度の炎症性病変が移入されることが明らかとなり、未知の自己抗原を認識する自己反応性T細胞のstrainを越えた抗原認識能をはじめて実証した。また、シェーグレン症候群に特異的な疾患モデルの確立を目的として、舌下腺粘液細胞に分化異常をきたすミュータントNFS/sldマウスに着目し、生後3日目に胸腺摘出を施すことによって、耳下腺・顎下腺のみならず、従来まで誘発の困難であった涙腺にも自己免疫性病変が高頻度に自然発症することを見いだした。更に、これらの病変の発症には雌雄差の存在することが明らかとなり、ヒト・シェーグレン症候群が女性に好発する自己免疫性唾液腺炎・涙腺炎として発症することから、このミュータントマウスをシェーグレン症候群の新しい疾患モデルとして提示することが可能となった。今後このはじめて確立されたマウス疾患モデルを用いてシェーグレン症候群の病因解明を進めると共に、将来的にはヒト疾患への治療を含めた実験医学的な基礎研究への道が拓けるものと期待している。

(歯学部口腔病理学教授)

## 『私 と 一 冊 の 本』

澤 田 健 吉

いま私は「私と一冊の本」というテーマで短文を書くように求められている。大袈裟なとり方をして、一冊という意味を自分の人生に影響した本の意味にとると、これはとんでもなく難しい課題になってくる。だが、幸に副題として「一読を薦めたい本」と書き添えてあるので、この線に沿って一冊の本を紹介することにしたい。

明治10年代にも、明治政府は最後まで新政権に反抗した東北・北海道を押えるため、その地の開発には特に気を使っていた。その一つが時の県令三島通庸が山形県福島県で行った道路工事、そのなかでも県境の栗子トンネル800メートルは難工事であった。成立直後の明治政府に予算的余裕があるわけではなく、当然地元からの労力の吸上げは苛酷をきわめ、福島事件という官民の衝突を起している。

ここでは反対に遭いながら、近代の西欧を手本にし西欧に対抗して急速に工業化を進めなければならなかった明治日本の姿、それを僻地で実現した三島通庸の見識を可とする立場を採っておく。もちろん反対に立ち上がったいわゆる自由民権派の言い分もあるが、これはおいておく。

そしてこれからがこの短文の主題になるのだが、三島通庸はこの工事を「鮭図」などで知られている画家高橋由一に写生させ、「栗子山隧道図」などを残している。しかし、明治初年のリアリズム画家として先駆的な仕事をしてきた高橋由一がいかにか生活のためとは言え、易々として三島通庸のおもわくに従うはずはない。この相反する活動分野を持つ二人の偉才の、この道路工事を介しての結び付には興味を持たねばならない。

二人の偉才が一つの現場で相会した時の、意地の突っ張りあいを想像するのは、難しいことではない。しかし、この衝突がいかなるものであったかまで詮索を進めるのは容易でなく、通常ここで話が切れている。一般的にも、異質のものの共存は相克を産むという観念的な言い回しですまされてしまうのが普通で、残念ながら具体的にその実態を追及した例はない。これでは、音楽会がつねにうっとり聞き入るものであり、展覧会がつねにその美に引き込まれるものと評価するのと同様で、中身がなく進歩がない。

ここで「私と一冊の本」になるのだが、もりたなるお著「山を貫く」文芸春秋発行がそれである。この解釈で全てがすんだわけでないのはもちろんだが、少なくとも私の求めている方向に踏み出した本と思ったので、「私の一冊の本」として挙げてみた。芳賀徹著「絵画の領分—近代日本比較文化史研究」朝日新聞発行という本もあるが、やはり前者は小説という自由さで三島と高橋を結び付ける意味での存在感があるとみた。

こうして両者の交点が定まると、県史資料編にある三島文書を一次資料とする多くの論稿と、昨年新宿の三越美術館のヨーロッパ風景画展で見た高橋由一が手本にしたであろう19世紀の画や風景画論と称する諸論文を読んだ印象が、二つの座標軸となって広い視野が整理されてくる。

いま一度、同じ主張を逆の方から繰り返し、結論を強調しておくことにする。広い視野を持ち、一つの専門の狭い領域に拘らないようにとは、繰り返し注意されることだろう。多くのことを学ばねばならないが、ただ、それらが独立であっては効果がない。それらを繋いでいかねばならないが、たかが小説されど小説、いまのところこのような目的のためのメディアとしてはこれしか考えられない「山を貫く」がヒントになったと思ったので、「私の一冊の本」として取り挙げてみた。

2年前の「すだち」の「一つの読書経験」と題する短文で、一冊の本では満足は得られない、次々に新しい本が引き出せることが大切だと書いたが、その時は柄にもなく哲学の本を取り上げた。今度は私の専門に近寄ったものを、前の結論を引き継ぎながら少々違った趣旨を加えつつ、しかも最近発行された小説を種に書き上げてみた。これでも編集委員会の意図に沿えるなら、幸運としなければならぬだろう。

(工学部建設工学科社会基盤工学教授)

## 『読書のすすめ』

# 『「ある」ための読書』

猿田真嗣

「ある」ための読書と聞いても、いまひとつピンとこない人が多いでしょう。

社会心理学者として著名なエーリッヒ・フロムは、人が生きていく上での基本的な存在の仕方に

は二種類あるといっています（佐野哲郎訳『生きるということ』紀伊國屋書店、原題はTo Have or to Be?）。ひとつは財産、知識、社会的地位、権力などの所有に専念する〈持つ様式〉であり、他のひとつは自己の能力を能動的に発揮し、生きることの喜びを確信できるようなくある様式〉です。

フロムはわかりやすい例をいくつかあげていますが、例えば「学習すること」について、次のように述べています。

「持つ存在様式の学生は、講義に耳を傾け、講義の言葉を聞き、それらの言葉の論理構造と意味とを理解し、できるかぎり、すべての言葉を彼らのルーズリーフ式のノートに書き込む — のちになって、筆記したものを暗記して試験に合格できるように。しかしその内容が彼ら自身の個々の思想体系の一部となって、それを豊かにし、広げることにはならない。……だれかほかの人の所説の集積の所有者となったというだけのことである。……

（ある存在様式の学生は）言葉や観念の受動的な入れものとなることはなく、彼らは耳を傾け、彼らは聞く。……能動的、生産的な方法で、彼らは受け入れ、彼らは反応する。……彼らはただ家へ持ち帰って記憶することができる知識を獲得するのではない。それぞれの学生が動かされ、変化したのだ。」（pp. 52～53）

新入生の皆さんの多くが経験してきた「つらく苦しい」受験勉強は、フロム流に言えば、「持つ」ための学習の典型であったといえるのではないのでしょうか。学ぶ喜びや感動ではなく、合格こそが目的となる「持つ」ための学習。大学での授業や研究が〈持つ様式〉ですすめられるなら、それは学問の楽しさや成長の喜びとは無縁の「不幸な学習」といわざるを得ないと思うのです。

大学における「ある」ための学習は、当然ながら「ある」ための読書を要求します。フロムは同書のなかで、〈持つ様式〉の読書と〈ある様式〉の読書の違いについても言及しています。

「（持つ様式の読者は）種々の哲学者の一人一人の言ったことを最も正確に暗誦できる学生である。彼らは博物館の物知りの案内人のようなものである。……彼らは哲学者に問いかけること、話しかけることを、学ばない。彼らは哲学者自身の矛盾や、彼らが或る問題を無視したり論点をはぐらかしたりしていることに気付くことを、学ばない。……

ある様式の読者はしばしば、大いに賞賛されている本でもまったく価値がなく、あるいはごく限られた価値しかないという結論に達する。あるいは彼らは或る本を十全に、時としては著者よりもよく理解しているかもしれない。著者は彼もしくは彼女が書いたすべてのものがみな同じように重要だ、と思っているかもしれないからである。」（pp. 60～61）

ここには、知的遺産に対するアイロニー（皮肉）が込められていると同時に、私たちが名著（といわれているもの）に接する場合の基本的な態度について、教えてくれているように思うのです。

（大学開放実践センター講師）

## 『私の図書館利用法』

清水直美

私は、本を借りるだけでなく他にも色々と図書館を利用させてもらっています。レポートを書くときや、次の講義までの時間をつぶすとき、予習をするときなどはよくお世話になりました。

特に、レポートを書くときには、ほとんど毎回利用させてもらいました。レポートを書くには、

何冊か参考文献が必要になる事が多いので、その本を探すためによく行きました。図書館は、どんなジャンルの本も豊富に揃っていて、しかも分野別に整理されているので目当ての本を探しやすいし、何ととっても“タダ”というのが最大の魅力だと思います。

また、自習室も完備されていて、一つ一つ机が仕切られているので、周りを気にせず勉強に専念したいときにはとてもいい所です。予習やレポートのときに利用すれば、はかどるのではないのでしょうか。

さらに、視聴覚室もあり、CD、カセットテープ、ビデオなどが使えるようになっていて、CDなどの貸出しも行われているので、友人も結構利用しているようです。

ところで、私は総合科学部に所属しているのですが、周知のように、幅広い分野における知識を深めることを目指している学部であるので、様々な知識が要求されます。授業内容も高校までとは全然違うし、教科書を使わないことも少なくないので、自分で知識を補う努力もしなければなりません。

そして、そこで大いに役立ってくれたのが図書館でした。先程、図書館にはどんなジャンルの本も豊富に揃っていると述べましたが、難易度についても、基礎知識がなければ読破できないものから、一般教養的な、易しくて理解しやすいものまで幅広く揃っているのです、自分の知識量に見合った本を探すことが可能です。だから、私も基礎知識を身につけなければならないときには、良い本がみつかり、非常に助かりました。

こうして、図書館とつき合ってきて、もう3年の月日が経過し、学生生活も残すところあと1年となってしまいました。しかし、まだまだ勉強し足りないことが沢山残されているので、あと1年、上手に図書館を利用していきたいと思っています。  
(総合科学部4年)

## 『読書感想文』

# 『「海辺の扉」 宮本 輝 著』

石 丸 直 澄

たとえば自分の息子がレタスを食べなかったとしよう。普通の親なら「だめじゃないか。」と言いながら軽く頭を叩くことぐらいはするだろう。しかし、軽く叩いた拍子に息子が椅子から転落し死亡してしまったとしたら、一体どうすればいいのだろう。

こんなことで最愛の息子を亡くし、過失致死罪という過去を背負った男が、妻と離婚し日本を遠く離れてギリシアで生活する。その後、ギリシア人と結婚し人生をやり直そうと腕くが、腕けば腕くほど過去の「あの一瞬」へと追いやられてしまう。ギリシアの慢性的な経済不況のためにまともな職にはあり就けない。金のために怪しげな政治結社の運び屋となるが、かつて日本で別れた妻からの未練の手紙を契機に日本に帰ることを決意する。ギリシア人の妻を残し日本に帰った男は、別れた日本人の前妻と何度となく身体を重ねる。如何ともしがたい哀しい「男の性」である。その後まもなくギリシアに残した妻が妊娠していた事実を知らされる。どこまで罪深い男なのだろうか。ギリシアの妻の妊娠を知った男は再びギリシアへともどって行く。

エーゲの青い海という自然が創り出した産物と古代ギリシア文明という人間が創り出した壮大な産物が、物も言わず三千年という歳月を経て静かに横たわっている。それに対し、男が創り出した愛しい息子とこれもまた男がつくり出したあの予想もしなかった一瞬が、男の脳裏からは決して離

れることはない。ギリシア文明の代表的な遺跡であるデルフォイの丘でギリシア人の妻は、「あなたの死んだ子供を生んであげる。」と言った。男は、妻をギリシア神話の「エロス」とさえ思えたにちがいない。「エロス」は「愛の神」である。妻は実際に子供を生んだ。「死んだ子供」を「生きた子供」として男に会わせたのである。

覆水盆に返らず。このことは真理であろうが、人生には見つけようとさえ思えば「代償」を見つることができる。合理的に物を考えれば、不幸を幸に変えることもできる。古代ギリシア文明は、この合理性に重きを置いていた。ギリシア文明に続く古代ローマ文明もそうであった。また古代ギリシア・ローマの復興を旗印としたルネサンスもそうであった。現代の資本主義は合理主義そのものである。リーズナブルな人生が賢い生き方とされていくのである。

しかし、人間は理屈ではどうも説明できない感情の世界を持っている。それは、人間の本能と理性とが複雑に絡み合って生まれる。混沌（カオス）の世界である。この男は、一生自分の犯した罪に苦悩するのであろう。苦悩するからこそ合理性を求め「よく生きる」という哲学的な命題に対面することができるのである。我々もまた日常というカオスの中で苦悩し続けるのである。逆に、苦悩し続けなければならないのであろう。

（歯学部歯学科6年）

## 『本 と 社 会』

三原玲子

我々は今、茶の間にいながらにして、世界中どこの国の事でも知ることができるし、電話一本で、たいていの物をわずかな期間で手に入れることができる。はてはアマゾンの奥地でさえあろうと、その気になれば世界中どこでも行くことが可能である。このような近代社会における情報・流通システムにより、日本を経済大国にまで発展させたものは、マスメディア、交通機関・コンピューター等の発達によるものである。そして、それらを支えているものは、いわゆるハイテク技術である。しかし、ハイテク技術とは、文明の発達に伴う副産物にしかすぎない。真に文明を発達させた基礎たるものは、“本”である。

本とは、はるか古来から生まれ、情報を伝達するための最も原始的な手段である。また最も有効な、情報の伝達方法である。本と、マスメディアの異なる点は、マスメディアのように、機械を通して情報を得るのではないということである。本は、ただ人間と本さえあれば、ただその本を読むという行為により情報を得ることができる。しかも、本は差別をしない。時間や場所、貧富で制限されず、いつでも、どこでも、だれであっても、本は我々に情報を与えてくれる。マスメディアやコンピューター等と違う点はそこである。たしかに、マスメディアやコンピューター等と比べると情報量は雲泥の差であろう。しかし、本であれば、その特性により、より大勢の人々に情報が与えられる。日本の知識水準を高めたのは、本であることは、否めない事実であろう。

このように本は、経済社会に大いに貢献している。たかが本であるが、本の社会に与えた恩恵は大きい。このハイテク技術があふれる社会においても、本は欠くことのできない存在である。我々はもう少し、本の大切さを見直すべきであると思う。

（医療技術短期大学部診療放射線技術学科3年）

# 『私の図書館での思い出』

谷 奥 恵美子

図書館には、古い本、新しい本、様々な分野の本があります。そこが図書館である以上、本があるのは当然で、読書好きの人にとっては、それこそが図書館の魅力なのでしょう。私も読書が好きな一人として、ほんの少し興味をもった本も気軽に読むチャンスを与えてくれる図書館はとても貴重な存在といえます。

私が図書館を好きな理由というのが、もう一つあります。それは、「匂い」です。図書館に入った途端、言い方は悪いのですが、カビくさいような、本たちのインクや紙の独特の重い匂いに気がきます。その匂いが図書館の外の世界とは異なる「本の世界」の雰囲気をつづけているように思えるのです。「読書は心の糧である」というのは、中学の頃の担任の先生の口癖でしたが、たくさん本が発散する匂いに誘われて一冊手にとり、それを読み終えた時、本から得た感動、新しい知識、読み終えたという達成感で心が満たされているのが分かります。読書が好きになるにつれて、本の匂い、つまり図書館の匂いもまた、私が図書館を好きな大事な一要素となったのです。

ところで、私は昨年友人の紹介で図書館で受付のアルバイトをすることになりました。作家の阿刀田高氏のエッセイに度々氏が図書館司書をしていた頃の話があり、図書館で働くことには以前から興味がありました。図書館も内側と外側ではやはり自ずと視点が変わってきます。職員となることで、今度は本を読む側から、本を読みやすい環境、利用しやすい環境づくりをする側へと立場が変わるのだから当然かもしれません。けれど私の場合バイトであるという立場上の曖昧さもあってか、気負いもなく、両者の立場を受付カウンターで観察できました。図書館の楽しみ方をもう一手に入れたようで、私にとってはとても面白い経験ができました。

昨年は出入り口に図書の無断持ち出し防止ゲートが設置されたり、図書検索システムの拡張が図られたりしました。特に後者によって、私達学生が欲しい文献を探すのにとっても便利になり、私は、図書館が次第に近代化をすすめる様子を身近かに実感しました。

図書館には書架に出していない本もあり、それを借りることができることができたのも、アルバイトをしたお陰でした。物事は知れば知るほど、知識にも楽しみ方にも幅がでてきます。そのことは図書館についても大いに言えることだと思いました。

(総合科学部4年)

## 『図書館だより』

# 『図書館の仕事と利用上の留意点』

図書館の仕事は、図書・雑誌・視聴覚資料の選定、発注、受入、目録、貸出等々と多岐にわたりますが、ここでは利用者の皆さんに関係の深いサービス部門の仕事について、図書館ではどのようなサービスを提供しているか、また、そのサービスはどうしたら受けられるかといった観点から、利用上の留意点も含めて説明します。なお、この説明は附属図書館本館を前提にしています。



### 〈入館及び退館〉

図書館へは自由に入ることができますが、ブックディテクション・システムを館内出入口に設置してありますので、出入口を間違えて入ったりしないようお願いします。また、退館時にゲートのブザーが鳴ったときは、カウンターの係員に申し出てください。鞆・外套・私物図書類の持ち込みもできます。

### 〈館内閲覧〉

2階には自然科学・工学系図書の閲覧室と、指定図書（授業に関係して必読すべき図書及び参考とすべき図書）の閲覧室が、また、3階には人文・社会科学系図書の閲覧室や新聞コーナー、一般月刊雑誌・週刊誌コーナーがあり、自由に閲覧することができます。辞書・事典等の参考図書も各閲覧室に配架されています。なお、閲覧された後は、各自で元の位置に戻してください。

### 〈館外貸出及び返却〉

資料の館外貸出を受けるためには、「図書館利用証」が必要になります。「学生証」を持参し貸出カウンターに交付の申請をして下さい。貸出冊数・期間は5冊まで10日以内借りることができます。また、貸出予約、貸出期間の延長も可能です。

返却は貸出カウンターの係員までお願いします。図書館閉館時は玄関に設置されているブックポストに投函して下さい。なお、貸出期間を超過した場合には、超過日数分の貸出停止となりますので十分注意してください。

### 〈資料の探し方〉

図書を探したいときには、カード目録とオンライン利用者目録（OPAC）の両方を検索する必要があります。現在のところOPACでは閲覧室配架図書、平成元年度受入図書の1部及び平成2年度以降の受入図書しか検索できませんので注意して下さい。雑誌はOPAC、学術雑誌総合目録等で調べることができます。

カード目録の引き方、OPACの使い方等が分からない場合には、レファレンス・カウンターの係員に尋ねて下さい。

なお、学内に求める資料が所蔵されていない場合には、他の大学図書館等から借り受けたり、コピーを取り寄せることもできます。また、直接出向いて利用したいときには紹介状を発行しています。

### 〈利用相談〉

レファレンス・カウンターでは、二次資料（抄録誌、索引誌等）の利用方法、文献の所在調査、特定の人の略歴・著作の調査や研究機関の所在地の調査等々についての相談を受け付けていますので係員に尋ねて下さい。

### 〈視聴覚室の利用〉

レコード・ビデオ・CD等の利用を希望する場合は、二階開架図書閲覧室内に備付けの「視聴覚資料リスト」を検索の上、貸出カウンターに申し込んで下さい。平日は9時から午後7時30分まで、土曜日は10時から午後3時30分まで利用することができます。

### 〈文献の複写〉

図書館所蔵の資料を複写したい場合は、「文献複写申込書」によりレファレンス・カウンターに申し込み下さい。1枚20円でコピーすることができます。受付時間は、平日は9時から11時30分、午後1時から4時までとなっております。

### 〈一般的留意点〉

図書館は学習・調査する場所であるとともに、思索する場所でもあります。館内では静粛を保ち他の利用者の迷惑にならないようにすると共に、また、館内での飲食、喫煙はできません。資料の汚損・破損等のないように注意して下さい。

以上、図書館サービスの概略を説明しましたが、図書館の資料、スペース、人(サービス)を多くに利用し、有意義な学生生活を送られるよう期待しています。また、図書館を利用するに当たって不明な点がありましたら、気軽に係員に尋ねて下さい。

## 『図書館の活用法(その一)』

図書館が所蔵する資料には種々の資料群があります。少しその中身について説明して見ましょう。大きく図書・雑誌・2次資料・視聴覚資料・新聞・パンフレット等に分けられます。一般的にいう図書のイメージは、相当幅広い概念を意味し、極端な場合は視聴覚資料を除く総てを意味する場合もあります。図書館では、これら資料を分かり易くするために次のように分け整理してあります。図書(単行書・シリーズ図書、全集類で特定のテーマに基づいて記述されたもの、場合によっては総説類も該当にいます)、雑誌(一般雑誌(教養・娯楽の定期行物)・学術雑誌(一般に専門雑誌と呼ぶ))、2次資料(検索を主とした目録・参考図書・索引・抄録誌等)、視聴覚資料(CD・LD・カセットブック・マイクロ資料等)、新聞、パンフレット類に分けています。

これらの資料は図書館において発注・受入れ、分類・整理されて図書館や教室・研究室等に保管・利用されています。このような沢山の資料は一定のルールに従って組織化されているわけですが、学生の皆さんに直接目に触れるものは、2階～3階にある開架図書閲覧室に配架されている図書に限られ、その他多数の資料は、書庫に収蔵されています。したがって、皆さんは資料の宝庫を目の前にしながら、これら沢山の資料に触れられないでいる訳です。図書館にはこのように沢山の資料がありますので、効果的に上手に利用すれば勉学に教養に多分な影響を与えるでしょう。利用方法は、4年次学生以上でない書庫に入れませんが、前掲の「図書館の仕事と利用上の留意点」の中の“資料の探し方”に記した方法により検索し、必要な資料を求めてください。そして最も上手な利用の仕方は、図書館内をぶらついてみることです。思わぬ発見、拾い物にでくわすはずです。また、色々と職員に聞いたり、頼んだりするのもよい方法で、あとはあなた次第です。

今回は、図書館の活用法(その一)として簡単であって簡単でない利用法の種明かしを皆さんに紹介しましたので、とりあえずトライしてみましょう。

## 『外国人留学生用資料コーナーの設置について』

本学における外国人留学生は逐年増加し、平成5年3月1日現在92名の多きにいたっている。また、教室・研究室等に在籍する研究者も漸増し、したがって図書館利用も次第に増加傾向をみるようになってきている。一方、利用についての図書館の対応は十分とはいえ、どちらかと言えば当該部局に依存することが多く今後の課題となっている。これらの中では、特に資料についての問題点が多く、図書館に備え付けられているものは、学生用の図書が中心となっている関係から外国語によるものが少なく、留学生が必要とするものは概ね教室・研究室等に備え付けられているため、非常に利用の幅が狭められているといえる。このことについては、図書館も手を拱いているわけではなく、少なくとも学内利用者並みに利用できる体制づくりを講じる必要から、利用環境の整備・改善を図ることにより、いくらかでも利用しやすい図書館とするため、その方向に向けた検討を積極的に取り組まなければならないとしていた。

この間、先般学生部で開催された留学生に対するガイダンスと留学生フォーラムにおいて、図書館利用に関する多くの要望が留学生から寄せられ、また徳島県留学生協会から図書館利用案内書の英文版作成等々の要請があった。そのため図書館としても早急な対応を図る必要が生じることとなり、このほど開催された附属図書館運営委員会において留学生に対する図書館の対応について協議し、次の5項目に亘る整備が承認され、実施に当たることになった。

- ① 留学生用資料コーナーの設置
- ② 留学生用資料の整備
- ③ 留学生用図書館利用案内の作成
- ④ サイン計画の一環として英字サイン化の検討
- ⑤ 図書館利用ガイダンスの実施

なお、この整備を進める上で本学国際教育研究交流資金事業等から留学生用資料の整備に必要な資金が提供されることとなり、本年3月設置をめどとした早急な受入・整理が行われると共に留学生用資料コーナーの設置に向けた対応がとられることになった。その結果、同コーナーの設置がこのほど完了し、既所蔵分資料を加え利用に供することになった。

今後の対応については、購入資料の逐年購入の継続化、利用案内等の整備改善を進めながら、留学生に対する利用環境の整備・充実につなげていきたいと考えている。

おわりに、本コーナー設置等にご協力を頂きました諸先生方、関係部局の方々に感謝の念をこめて御礼を申し上げます。



# 『本館情報検索コーナーの利用について』

ブックディテクションシステムの導入に伴い、図書館2階に情報検索コーナーを設置し、CD-ROM検索用パソコン及びOPAC(オンライン利用者用端末)を備え付けましたので、次の方法によりご利用ください。

## (1) CD-ROMについて

CD-ROMの検索は検索語も豊富で、メニュー画面などやさしい検索方式なので、利用者自身が簡単に操作、検索できます。

本館には次のようなCD-ROM版資料を備え付けてあります。

- ① CD-H I A S K 朝日新聞の1985-90年各1年分の記事情報を全文で収録
- ② CD-W O R D 8カ国語(日、英、仏、独、西、伊、蘭、中)科学技術用語辞典
- ③ J-B I S C 書誌情報データベース「JAPAN/MARK」のCD-ROM版  
(1969年以降)
- ④ 学術雑誌総合目録
- ⑤ 現代日本科学技術者大辞典/現代日本執筆者大辞典
- ⑥ 広辞苑 第3版
- ⑦ 模範六法 1990年版
- ⑧ 世界大百科事典

利用時間：月曜日～金曜日 9:00～20:00

(学生休業期間中は17:00まで)

土曜日 10:00～16:00

学内者(教職員、院生、学生)はすべて無料で利用できます。

利用についての詳細は学術情報係(☎6142, 6151, 6152)にお尋ねください。

## (2) CD-ROMのリモートアクセスについて

平成4年12月に本館・分館間のネットワーク化の第一段階として、両館のCD-ROM用パソコンを公衆回線により直結し、ソフトウェアの共有と遠隔地からの利用を可能にしました。これにより、蔵本分館まで出かけなくても、本館から蔵本分館所蔵のCD-ROMを検索できるようになりました。

現在、ソフトウェアは医学文献データベースである「MEDLINE」のCD-ROM版(1966年以降)を実験的に導入しています。

将来的には学内LANと接続することにより、研究室からも検索できるようにしたいと考えています。

利用時間：月曜日～金曜日 9:00～17:00

土曜日は利用できません。

ただし、利用する場合には事前に蔵本分館情報調査係(☎31-3100内線6518, 6520)に予約が必要です。

検索時間は1回1時間となっています。

学内者(教職員、院生、学生)はすべて無料で使用できます。

利用についての詳細は学術情報係(☎6142, 6151, 6152)にお尋ねください。

### (3) OPACについて

利用者端末から蔵書ファイルの検索を行えるようにしたものです。図書館開架図書の大部分と研究室購入分は1990年4月以降受入分のデータが入力されています。

利用時間：月曜日～金曜日 9：00～20：00

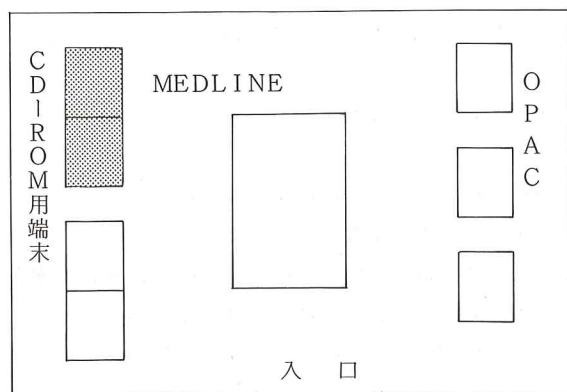
(学生休業期間中は17：00まで)

水曜日 13：00～20：00

土曜日 10：00～16：00

学内者(教職員, 院生, 学生)はすべて利用できます。

〔情報検索コーナー機器配置図〕



## 『平成4年度(第2回) 徳島大学学術情報に関する講演会開催』

学術情報に関する正しい知識と理解を深めるために、3月8日(月)に柴田正美三重大学教授を本学に迎え「高度情報化社会への対応」と題して講演が行われた。

会場となった附属図書館大視聴覚室には、本学教職員及び近隣大学の図書館員約50人が参加した。

なお、内容は次のとおりで学術情報に係わる関係者が心掛けなければならない対応の在り方について、有意義な示唆がなされた。

1. 学術情報環境の変化と今日の状況
2. 情報化の進展への対応
3. 情報化の今後の動向と課題

## 『会

## 議』

## 附属図書館運営委員会

## 第4回

日 時 平成4年11月30日(月) 15時10分から

場 所 附属図書館会議室

- 議 題
1. 学内設備等充実費について
  2. 外国人留学生に対する図書館の対応について

## 第5回

日 時 平成5年1月18日(月) 15時10分から

場 所 附属図書館会議室

- 議 題
1. 附属図書館運営委員会規則の一部改正(案)について
  2. 附属図書館長選考規則の一部改正(案)について
  3. 附属図書館常三島地区運営に関する申し合せの一部改正(案)について
  4. 附属図書館蔵本分館運営委員会規則の一部改正(案)について
  5. 附属図書館本館利用細則の一部改正(案)について
  6. 平成4年度学生用図書購入費(第2次)配分(案)について
  7. 平成4年度外国雑誌購入費配分(案)について
  8. 平成4年度予算節約額について

~~~~~ 本学教官著作寄贈図書(平成4年10月～平成5年2月) ~~~~~

| 著 者         | 書 名                    | 出 版                      | 寄 贈 者 |
|-------------|------------------------|--------------------------|-------|
| 藤原 晴夫       | Residual Stresse - III | Elsevier Applied Science | 藤原 晴夫 |
| 丸山 嘉信       | 日本のこころ                 | 近代文藝社                    | 丸山 嘉信 |
| 鈴木茂・小淵港 編   | リゾートの総合的研究             | 晃 洋 書 房                  | 中谷 武雄 |
| 天野光三・青山吉隆 編 | 図説都市計画—手法と基礎知識—        | 丸善株式会社                   | 青山 吉隆 |
| 小林 孔        | 小林孔作品集                 | 小 林 孔                    | 小林 孔  |

# 『人 事 往 来』

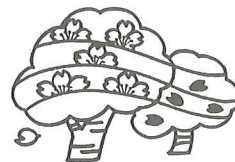
(昇 任)

尾 原 忠 雄 図 書 館 専 門 員 平成 4. 10. 1

(出 向)

渡 邊 章 夫 横 浜 国 立 大 学 附 属 図 書 館 平成 5. 1. 1

(前 学 術 情 報 係)



---

## 編 集 後 記

この「すだち(館報)」は、年二回春秋に分けて発行されます。春の号は、新入生の方々に図書館の利用の仕方や読書の楽しみ方などについて特集を組み編集されています。この号には、イラストで館内の施設案内を漫画風楽しく見てもらえるように、折り込みで挿入してありますので、新入生の方々は是非見ていただき図書館に足を向けてみましょう。

図書館は、皆様方のための勉学、教養を身につけるに必要な登竜門となる施設です。で、十分活用されるか否かが、短い(長い?)学生生活を楽しくも苦しくもさせる分かれ道であるとも言えると思います。ただ図書館員も新入生の方々にだけにサービスをしているわけではありませんので、自分自身で楽しみ方を探してみることが大切と言えるでしょう。

---

編集委員会：委員長・後藤健次 委員・林 良夫、小野徳郎

発行 徳島大学附属図書館

(〒770)徳島市南常三島町2丁目1番地 徳島(0886)23-2310 内線(6111)

FAX 附属図書館(本館)(0886)55-9593 蔵本分館(0886)33-2950